⑤「陸軍中野学校」

2013（平成 25）年 4 月に開設された明治大学中野キャンパス。この敷地には戦前，登戸研究所とも大変関わりの深い「陸軍中野学校」（以下中野学校）がありました。

登戸研究所が秘密戦（防諜・諜報活動，謀略活動，宣伝工作）用兵器の研究・製造を担っていたのに対し，中野学校は秘密戦を行う要員を育成する機関でした。登戸研究所の技術開発には，中野学校出身者の現場からの意見が採りいれられたり，中野学校出身者が任地に出発する前には，必要に応じて登戸研究所で秘密戦用兵器の取扱を習得するなど，多くの交流がありました。また，伴繁雄氏など登戸研究所所員が中野学校の臨時教官として教育に当たりました。

明治大学中野キャンパス外観（資料館撮影）

(1) 中野学校の誕生

中野学校は，日本の戦況によって教育内容や出身者たちの任務が変化していきます。今回は大きく３つの時期にわけて紹介していきます。

陸軍は，世界の情勢に応じ日本でも本格的に秘密戦要員を育成する必要を感じ，1938 年，九段下に「後方勤務要員養成所」を開設します。これが中野学校の前身となります。

養成所の時期は，平時における秘密戦，特に海外勤務要員育成と，関東軍・支那派遣軍の特務機関に配属される者との教育が重視されました。

卒業生は支那派遣軍および関東軍において対中・対英米・対ソ防諜・諜報の任務にあたります。対中国においては，戦局が有利に進められるよう現地住民を日本軍に協力させる懐柔工作などを行いました。また，登戸研究所と連繋し経済謀略工作＝「杉工作」に当たります。杉工作には 1941 年 7 月より終戦時まで計８名の中野学校出身者が配属されました。登戸研究所で製造された蒋介石政権の偽造法幣を，上海にある阪田機関まで安全に運搬することが主な任務でした。

中野学校卒業生の配属先例　「乙・丙・戊」は学生の種類（甲もあった），「俣」は 1944 年に開設した二俣分教所の学生を示している

一期生（1938.4 ～ 39.8）	参謀本部第二部第五課，第六課，第七課，陸軍省兵務局防衛課，中野学校に配属され，三か月乃至一年間実務についたあと，1940 年内に海外駐在員または研究員（欧州，中近東，東南アジア，アメリカ，中南米），ハルビン機関，チタ [旧ソビエト連邦] 領事館，満州国治安部などに勤務
乙Ⅰ短（1939.11 ～ 40.10）	多数が支那派遣軍および関東軍付けとして配属される / 内７名は乙Ⅱ長期学生として 1941 年 7 月まで中野学校で引き続き教育を受ける / 支那総軍より２名，南機関より２名，陸軍省防衛課より１名が任地より帰任し，再び中野学校で特別長期学生として教育を受ける
丙２（1940.11 ～ 41.6）	登戸研究所，陸軍軍事資料部，参謀本部第二部第八課，関東軍，ハルビン特務機関，チタ領事館
乙Ⅱ長（1940.12 ～ 41.7）	中野学校，参謀本部第二部第六課，第七課，第八課，陸軍省防衛課，関東軍（満州国），支那派遣軍，北部軍 ※南方進出に備え関東軍，支那派遣軍及び南方作戦要員として赴任または待機の状態
特別長期学生（1941.9 ～ 42.3）	現地より入校の５名（乙Ⅰ短）は各々の任地に帰任，他は北方軍，関東軍，参謀本部，藤原機関，支那総軍，陸軍省防衛課，実験隊に各々配属
情報教育学生（1943.1 ～ 3）	卒業後一カ月現地教育があり南方，ビルマ，ニューギニア方面に赴任
６戊（1944.4 ～ 1944.9）	実験隊，防衛課，登戸研究所，中国，仏印，比島，沖縄，台湾，通信班は大部分は離島残置諜者として沖縄を中心とした離島に配置
俣１（1944.9 ～ 12）	比島，インドネシア，仏印，台湾，沖縄，および本土の各軍令部に配属，神兵皇隊 [泉部隊と思われる] ６名
俣２（1944.12 ～ 45.3）	支那総軍２８名，台湾軍２５名，関東軍４名，朝鮮軍１９名，大本営７名，内地各軍管区司令部 138 名
俣３（1945.4 ～ 7）	第十七方面軍司令部 70 余名，参謀本部別班にも赴任が決定していたが，戦況悪化のため待機のまま終戦

緊張状態が続くソ連に対しては，満州 - ソ連の国境においての防諜活動，ソ連国内に赴き諜報活動を行い，対ソ戦争勃発時に備えていました。

また，海外勤務要員として派遣された卒業生は，身分を隠して新聞通信員・商社員・外交官などになりすまし，仮想敵国・中立国・独伊をはじめとする同盟諸国に勤務し，諜報活動などの任務に当たりました。彼らはアジア太平洋戦争開戦と同時に抑留されるか，もしくは 1945 年の敗戦時までその国で活動を続けました。

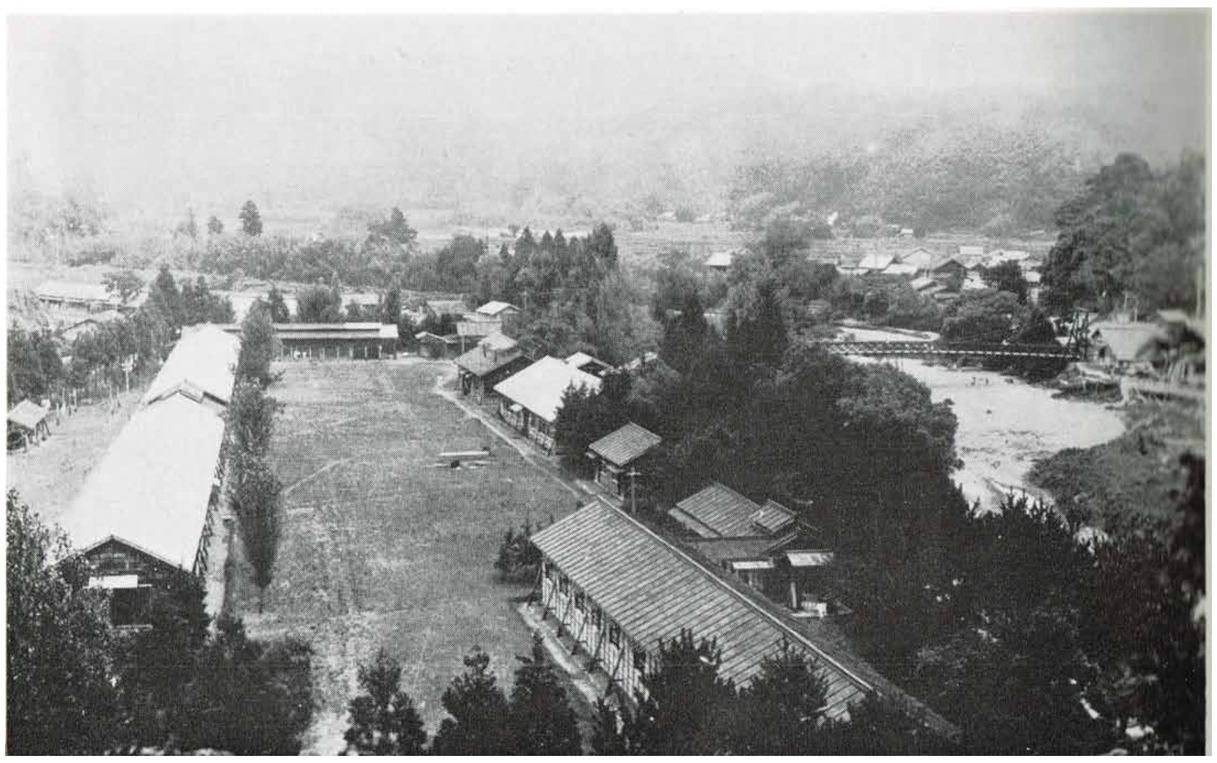
(2) 後方勤務要員から遊撃戦要員養成機関へ

1939（昭和 14）年３月に九段下（くだんした）から旧中野電信学校跡地に移転し，1940 年５月に「陸軍中野学校令」が発令され，名称が「陸軍中野学校」となり，陸軍直轄の学校となります。中野学校となってからは，秘密戦を諜報・防諜・謀略・宣伝として体系化し，教育がより実戦に即したものとなります。また，南方進出論が高まる国内情勢を踏まえ，占領地行政や現地語教育が科目に加わります。卒業生は，南方作戦要員としてインドなどのアジアに配置され，各国の独立運動を利用した工作を展開するように訓練されました。

ビルマ独立義勇軍（ぎゆうぐん）へ参加する志願兵たち
（中野校友会編『陸軍中野学校』より）
現地義勇軍には多くの中野学校出身者が関わった。

1941 年 12 月８日にアジア太平洋戦争が開戦したことにより，中野学校へ要請される内容もより実戦的なものへと変化していきます。中でも，1942 年６月のミッドウェー海戦の敗北に続く日米両軍の攻守逆転が，中野学校に新たな使命を与えます。参謀本部は武力戦を補うための遊撃戦（ゆうげきせん）の展開にふみきり，1942 年８月，遊撃戦を率いる幹部教育を中野学校に命じます。これにより，従来の秘密戦教育に加えて候察（こうさつ）（敵情の偵察）や潜行法（せんこうほう）（後方攪乱（かくらん）のための潜伏（せんぷく））など，遊撃戦に必要な，より実戦的な科目が加わりました。短期の教育を経て卒業生たちは遊撃戦を行うため，最前戦域に送られます。戦局が悪化し，敵軍に占領された地域においては残置諜者（ざんちちょうしゃ）として活動できるよう，秘密通信法も学びました。

1944 年８月には，静岡県磐田郡二俣町（現・静岡県浜松市天竜区）に「陸軍中野学校二俣分教所（いわたぐんふたまたちょう）」が新設され，遊撃隊幹部要員の教育が本格的に開始されます。本土決戦が想定され始める中，二俣分教所の創設，本格的な遊撃隊幹部要員教育の開始と相前後して，1944 年８月，参謀本部は中野学校に「国内遊撃戦教令」の起案を命じます。そして 1945 年１月 15 日にこれが印刷配布されました。



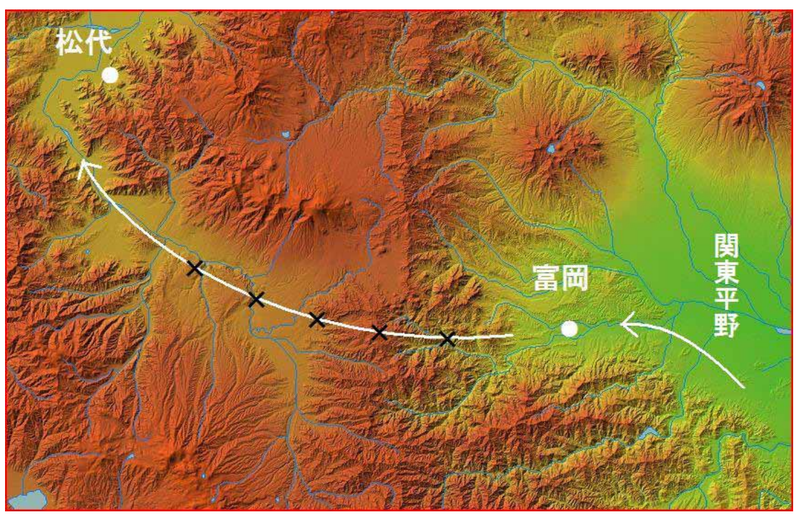
1945 年時の陸軍中野学校二俣分教所
（中野校友会編『陸軍中野学校』より）

(3) 国内遊撃戦要員養成機関へ

1945（昭和 20）年 3 月頃からの日本本土上空の空襲激化により日常の訓練に支障が出たこと，本土決戦と松代大本営構想が現実味を帯びてきたこともあり，中野学校は群馬県の富岡へ移転します。二俣（ふたまた）分教所を開校した当初は日本国内での遊撃戦は想定されていませんでしたが，敵兵の上陸を想定した実戦での即戦力が大量に必要とされたことで，富岡への疎開と同時に国内でのゲリラ戦実行部隊である遊撃戦部隊の指揮官養成機関へと中野学校の役割は変化していきました。

富岡への疎開

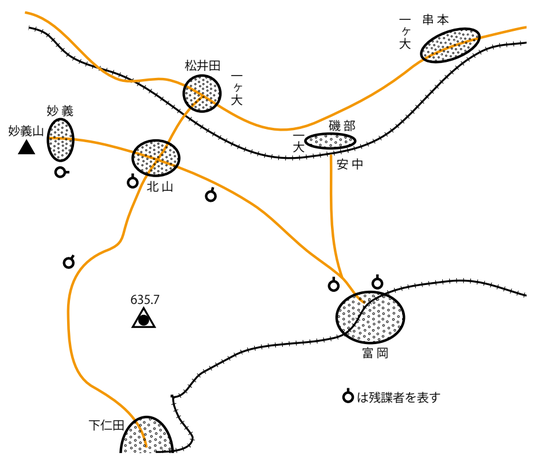
1945 年 3 月下旬から 4 月中，中野学校は当時の県立富岡中学校（現・県立富岡高等学校）を中心に移転しました。富岡は松代と東京を結ぶ信越本線の沿線で，周囲は妙義山（みょうぎさん）など峻険（しゅんけん）な山に囲まれています。右の図が示すように，本土決戦の際も最後ここで敵の進撃を抑えれば松代を守ることができます。ここでの演習で富岡周辺での遊撃戦が想定されていたことからも，実戦部隊を実地で養成する役割が求められたことがわかります。



関東平野から松代へ向かうルート上で，富岡は敵の進撃を止める要衝（ようしょう）となる。（国土地理院色別標高図より資料館作成）

「陸軍中野学校終焉の地」碑
（菊池実氏撮影）現・県立富岡高校内にある。

野外潜在演習計画 [6 月 5, 6 日実施]（齋藤充功『陸軍中野学校の真実』をもとに作成）



想定

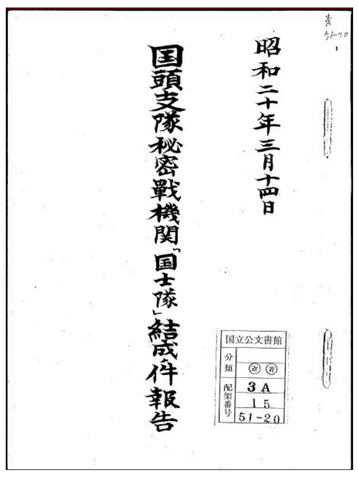
1，関東平野を深く侵寇（しんこう）せる米軍は信越線及び上信電鉄に沿う地区の要点を確保し宣伝，宣撫（せんぶ）工作を行うと共に近次特に活発なる討伐（とうばつ）行動を開始せり

2，5 月上旬正規軍と協力し果敢なる遊撃戦を敢行（かんこう）し第十特警隊は更に妙義山深く潜在し敵後方攪乱（かくらん）を企図（きと）しあり

3，6 月 5 日における彼我の態勢概要左図の如し

沖縄での遊撃戦・秘密戦の展開

沖縄戦では，中野学校出身者は国頭（くにがみ）支隊の中で民衆を組織した護郷隊（ごきょうたい）を教育し遊撃戦を実際に展開しました。また沖縄戦後は身分を秘匿（ひとく）して離島に残置工作員（ざんちこうさくいん）として潜入した者もいました。国頭支隊では秘密戦機関「国士隊（こくしたい）」が結成され民衆に対し諜報戦（ちょうほうせん）の指導をしたとの記録があります。また，米軍側に保護された民間人をスパイ容疑で殺傷するという事件もありました。



『国頭支隊秘密戦機関「国士隊」結成ノ件報告』表紙（国立公文書館アジア歴史資料センター提供）

中野学校出身者による特殊精鋭部隊

この頃中野学校出身者は，国内の各方面軍で遊撃戦作戦計画の即戦力として組み込まれました。中でも関東甲信越の防衛が任務の東部軍の関八州部隊（かんはっしゅうぶたい），泉（いずみ）部隊は特殊で重要な役割を担いました。

関八州部隊：1945 年 4 ～ 5 月に編成された東部軍直轄の遊撃部隊です。本土決戦では内陸へ敵を引き込む当初の想定の下，敵軍占領下の残留国民の組織と敵軍への後方攪乱などが任務でした。本部は東京都西多摩郡五日市町（いつかいちまち）にあり，各地区司令部で遊撃戦指導と訓練を行いました。遊撃戦に役立つ特技や不撓不屈（ふとうふくつ）の精神などが要求されたため，東部軍の最精鋭部隊とも言われました。

泉部隊：本土決戦時は関東平野で展開する遊撃戦指導者としての任務のために秘密裏に結成されました。本部は中野学校本部と同じ富岡中学校に置かれ，完全に身分，行動を秘匿して個人，または少人数で泉のように湧き出て遊撃戦を行うことが任務でした。現在でも実態は謎に包まれています。

（参考：中野校友会編『陸軍中野学校』）

第二章　疎開する登戸研究所

①『大月日誌』から読み解く登戸研究所の疎開

(1)『大月日誌』とは

ここで紹介する『大月日誌』とは，登戸研究所で庶務等を担当していた大月陸雄技術大尉が，1945（昭和 20）年１月１日から８月３日まで書き残した日誌のことで，ご遺族より当館へ寄贈された第一級資料です。大月氏は伴繁雄氏と同様，登戸研究所の前身である，陸軍科学研究所の時代より勤務していた将校であり，登戸研究所に関する重要事項を把握していた人物です。

大月氏の日誌を通じ，登戸研究所の疎開がどのように進められ，本土決戦に向けて登戸研究所がどのような準備を担っていたのかをここでは検証します。

登戸研究所所員集合写真（伴和子氏寄贈）
写真中央が大月陸雄氏。
右に座っているのは伴繁雄氏。

(2) 疎開地選定

大月氏は１月・４月・５月・６月の計４回，大阪・兵庫を中心とした関西方面に出張，４月・７月の計２回，登戸研究所の主要な疎開先である長野県南伊那地域に出張しています。中でも，関西方面の出張は登戸研究所の疎開先選定に大きく関わっているようで，４月８日に大月氏の出身地である小川村（現・兵庫県丹波市）が疎開地の一つとして決定したことが日誌より解ります。また，疎開地探しに苦労している様も下記の記述からわかります。関西方面への出張直後に長野県中沢村へ赴き，状況を報告しているのも興味深い点です。４月 11 日付『赤穂国民学校学校日誌』には「中沢国民学校長杉村君挨拶に登戸研究所職員来校」との記述があります。

さらに，関西方面の出張時には，疎開地選定作業だけではなく，登戸研究所で使用する資材確保も各方面で行っていたことも解ります。

４月７日	朝四人自転車にて日本火薬見学，十三時発にて和田山に行き原田任太郎氏の紹介にて種々調査群鶴亭に投宿，大した良所を得ず一同落胆，根岸曹長は香里より研「う」を中沢へ運搬せらむべしと先導す
４月８日	朝東京の姉に電話し福地山まで周遊してもらう / 福地九時着長野氏のところへ行き福知山方面も見込みあるにつき [福知山市] 河守に行き□下氏に種々依頼 / 長野氏と同車福知山に四時半着六時発にて柏原菊水館に着き村上，湯原と協議し**谷川附近に決定す**
４月１０日	新宿 [夜] 十時四〇分発にて中沢 [※長野県伊那地方，登戸研究所の疎開先] に向ふ
４月１１日	朝赤穂駅に到着　タクシーにて中沢着 / 科長，伊藤，高野氏，夏目に状況報告 / 午後夏目さんに案内してもらい各地を視察し [夜] 七時発にて伊藤，高野 ，川井と芹沢同車 帰途に着

『大月日誌』より抜粋，[ ] 内は前後関係から判読した箇所または資料館加筆，旧漢字は新漢字で表記（以下特記ない場合同じ）

(3) 中沢村での受け入れ準備と編成について

4 月 29 日の天長節式中，所長より登戸研究所の疎開が全所員に告げられたことが，北沢隆次氏の所長葬儀時に述べた追悼の辞より推測されています。これを機に登戸研究所は各疎開先へ本格的に移転していきます。その後、6 月 15 日付『大月日誌』には「行政本部技術部の□西地区に急に移転」と記述があります。この点についてはいくつかの証言があります。

1942 年 2 月より兵器行政本部技術部制式課にタイピストとして勤めていた女性は「[1945 年] 5 月 25 日の空襲で, 戸山ヶ原（現・新宿区百人町）にあった兵器行政本部は焼けてしまった。だから 6 月頃に [登戸研究所敷地に] 移転してきたが，空っぽだった」と当時の様子を証言しています。この点については，兵器行政本部技術部技術課の将校も『同台クラブ講演集』の中で「兵器行政本部の技術部は登戸研究所が疎開した跡に，疎開して終戦まで仕事をしていました。」と語っています。

4 月 29 日以降，機械なども含めて登戸研究所のほとんどの機能が各疎開先に移転していき，元の敷地は建物のみを残した状態のところに，空襲で焼け出された兵器行政本部技術部が移転してきた様子が伝わってきます。

4 月 18 日	川井大尉に木材の交渉をせるところ，四分千石　三寸各五百石より取得不能のごとき返事あり。明日交渉に行くとのこと / 夕刻北澤技師と編成の修正をやる
4 月 20 日	朝輸送のことに関して総務科長室にて打ち合わせ会議 / 貨車および自動車を夫々所において統制する様に決定
4 月 21 日	朝「トラック」にて勝俣少尉と一造 [東京第一陸軍造兵廠] に行き，資材交渉 / 二造 [東京第二陸軍造兵廠] に行き，堀部大佐に頼んで材料係より「アルコール」「ベンゾール」などの有償補転を依頼
4 月 23 日	午前中輸送班装置に関する会議あり
4 月 29 日	朝天長節の式があり式後，伴，夏目，北澤と一日がかりで中沢の編成を考え夕方科長の所へ行き大体の話をする
5 月 2 日	行本 [陸軍兵器行政本部] 三科, 一・二科, 資材, 造兵等の人たちがきて, 登戸の器材の見学 / 夜伊藤・川井両氏と相互の輸送関係者の宴に出席
5 月 3 日	松井と一造にいき，松村中尉，高橋中尉，泊中尉と資材入手の打ち合わせ /18 時頃登戸研究所に帰り，第三科の食堂で送別会
5 月 7 日	夕刻，慰労，送別を兼ねた庶務班の会を実施
5 月 8 日	式後早昼にして行本に行きその際新宿 へ着物を三個持って行き預ける / 行政本部器材班や資材課に立寄り種々打ち合わせす
5 月 24 日	午後四時過ぎより総務科長に於いて建物の分配，人員の件等に就いて打ち合わす
5 月 25 日	午後一時より班長 其の他集合食事、建物の疎開等の話を決定す / 晩輸送班の慰労会を実施す

本格的に各疎開地へ移転を始める前に，兵器行政本部と資材の交渉，輸送の準備などに大月氏が奔走していた様が日誌より読み取れます。4 月 21 日にアルコール，ベンゾール確保の交渉について記述がありますが，輸送車用燃料のためでしょうか。戦争末期には車輌だけではなく，燃料の確保も困難になるため，大月氏の苦労がしのばれます。

また，赤穂・中沢双方の学校日誌（詳しくは第三章をご覧ください）と『大月日誌』を併せて考えてみると，4 月上旬より中沢国民学校を工場にする工事が開始され，その工事に生徒たちが動員されたことが推定されます。

4 月 29 日に所長より疎開が告げられた後，５月２日から７日まで登戸研究所で数度の送別会＝「輸送関係者の宴」「送別を兼ねた庶務班の会」が行われています。その後５月８日に「式後」の記述がありますが，恐らく移転・輸送に関する登戸研究所からの送り出し開始の式だと思われます。5 月 25 日に輸送班の慰労会が行われていることから，５月でだいたいの輸送が完了したことが推測されます。

一方伊那地方においては，４月に中沢国民学校の工場化が進み，５月には赤穂国民学校が工場化されていきます。5 月 30 日付『赤穂国民学校日誌』には後に中沢製造所分場（赤穂国民学校内に築かれた工場のこと）長となる高倉大尉が来館し「登戸学校工場への動員　高一 [高等小学校１年生] の２クラスと高二 [同２年生] の 60 名」と記述があります。この点より，赤穂国民学校も工場にしたことで，中沢製造所の規模が拡大し，それに併せて５月 24 日に建物の分配，人員についての協議が行われ，赤穂国民学校生徒が増員されたことも考えられます。

(4)　―本土決戦準備と登戸研究所

６月に，関東・東北・東海地方の本土決戦作戦を担う第一総軍司令官が登戸研究所を視察していることが『大月日誌』に記されています。

６月 15 日	[第一総軍司令官] 杉山元帥，陸軍次官生ほか来所

この時のことを，参謀次長であった河邉虎四郎中将は『次長日誌』に次のように記録しています。「午後登戸研究所に新兵器，秘密兵器等を見学す，（杉山元帥，参謀総長，陸軍次官，教育総監部本部長其の外多数と共に），相変わらず原始的なる武器を並べて供覧す，寡なからず失望す。」河邉参謀次長の登戸研究所への評価は厳しいものでしたが，第一総軍司令官自らが視察に来ることは，九十九里浜もしくは相模湾への米軍来襲が年内と推測され始める戦況下，登戸研究所にかける期待も大きかったことが伺えます。

本土決戦に向けて登戸研究所が製造した兵器は，それまでのような秘密戦全般にかかわるものから，より実戦的なものへと変容したことが以下の『大月日誌』の記述より推測されます。

〈決戦兵器㋕について〉

㋕とは野村恭雄少将を中心に開発された熱線（赤外線）誘導の対艦船爆弾のことです。国運を担う決戦兵器として，1944 年５月より終戦まで研究開発が行われ，防諜上の理由から「決戦」の頭文字をとって㋕とされました。この最重要決戦兵器である㋕に登戸研究所も関わっていたことが大月日誌より判明しました。

１月 23 日	㋕「チトスケ」の発送に関し，伴少佐達に夫々今後の件を依頼する

野村少将の記録によると，１月は㋕研究開発の第二期に入っており，兵器化の研究をしている段階です。日誌に記述のある「チトスケ」が何であるかは不明ですが，伴氏らが行っていた研究が㋕と何らかの関係性があったことが推測されます。ただし，大月日誌にはこれ以上の㋕に関する記述はなく，登戸研究所においての㋕研究がその後どうなったかは不明です。

陸軍の参謀本部作戦部長であった宮崎中将の日誌より，㋕が軍の並々ならぬ期待をかけられて開発されたものであったことが解ります。特に５月 24 日付の宮崎日誌より，本土決戦になった場合，㋕が大きな役割を果たすことを期待している様が読み取れます。

(1944 年) 12 月 27 日	一，㋕実験の結果　二十九日総合試験　浜名湖附近にて実行
(1945 年) 5 月 24 日	昨夕，野村少将㋕研究の進捗状況について報告あり，理論的に成立す，実兵器としてなお１～２か月を要すと，実はさらにさらに時を必要とすへし / 先に神光に関する報あり　共に国家を救う神風なり　神に祈って戦機に間に合う如(ごと)く成功せんことを
7 月 14 日	㋕の６月演習の総合判決，頭脳部は理論的によきも実行上に未(び)し，11 月戦力発揮を目途とし努力す，来春には命中率あるへし / 科学技術の根本的研究の態度　米国の科学技術を見ての謙虚なる態度を要す

軍事史学会編『大本営陸軍部作戦部長宮崎周一中将日誌』錦正社、2003 年より抜粋

＜研「う」について＞

研「う」とは東京第二陸軍造兵廠(ぞうへいしょう)研究員であった陸軍技師石田栄が発明した，パテ状で自由に形状が変えられる新型爆薬のことです。４月７日付の日記には研「う」を中沢製造所に運搬したことが書かれています。中沢製造所では，動員学徒に缶詰型爆弾を製造させていました。当時中沢製造所に動員された中沢国民学校高等科２年生の女性は，「粘土のような変幻自在の爆薬を缶詰につめた。隙間ができないようにヘラで丁寧につめた」と証言しています。日誌の内容と証言を併せて考えてみると，缶詰型爆弾には研「う」が利用されていたことが推定されます。

４月７日	根岸曹長は香里より研「う」を中沢へ運搬せらむべしと先導す
４月９日	香里製造所に向かい，工務課長および所長に会い，「研」うの交渉をして，大阪駅に帰る
５月 28 日	夏目さんと二造に研「う」その他の件で打ち合わせ
５月 30 日	一造行きの「トラック」で行政本部に行き，国澤(くにざわ)中佐その他に会い，研「う」の油の件を打ち合わせ
６月 13 日	大造にて仕事の整理後，香里製造所にいき，研うの交渉を福田少佐にした

日誌中に登場する香里(こうり)製造所とは東京第二陸軍造兵廠香里製造所のことです。現在の大阪府枚方市(ひらかたし)香里ヶ丘にありました。研「う」は香里製造所で主に製造されていたことが日誌より推測されます。

(5)　―登戸研究所の編成改編のうごき

７月５日	応接室にて登戸の編成会議　折角軌道に乗りかけた四科の制作業務が目茶目茶になりそうで困った
７月６日	科長室にて編成などに関する会議　午前の科長会議にて昨日の事項が又変わって来た様子だった
７月７日	所長室にて一日登戸の将来の編制について大会議　相当の議論百出せるも所長の明晰(めいせき)なる裁断により，大方針ならびに細部事項決定す

大本営内部で，本土決戦において波打ち際を含む水際(みずぎわ)作戦への変更が進んでいく中，登戸研究所では編成についての大変更を余儀なくされたことが分かります。大本営の方針に従ったものなのでしょうか。これ以上の記述・資料がないため詳細は分かりませんが，本土決戦が目前に迫る中，登戸研究所に課された使命もまた変わっていったのでしょう。

②疎開先での登戸研究所の役割分担

『大月日誌』では，登戸研究所幹部が疎開の候補地として各地を見て回ったことがわかります。分散疎開先でそれぞれ目的に適った役割が定められていたためです。第五展示室のパネル「登戸研究所の移転」でも紹介していますが，ここでは疎開先におけるそれぞれの役割について，最新の調査に基づいて検討します。[以下，地名は当時の名称]

(1) 本部・中沢分室・伊那村分工場　< 長野県伊那地方 >

本部と中沢分室（製造所），伊那村分工場として庶務と第一科，第二科，第四科の機能が移転しました。中でも中沢分室は研究部門の中心であるだけでなく疎開後に赤穂，飯島へと拡大し，それぞれが学生を大勢動員し，兵器工場では『大月日誌』にも登場する研「う」を使用した缶詰型爆弾などを製造しました。中沢では写真に関する研究，飯島では毒物など化学兵器の研究も続けられていました。伊那村分工場では現地学生の動員はありませんでしたが，爆弾等の遊撃部隊員用の「現地調達品」と呼ばれる兵器の製造を行っていました。

本　　部	長野県上伊那郡宮田村真慶寺 役割…企画，庶務，人事，経理，医務，福利
中沢分室 （製造所）	長野県上伊那郡中沢村中沢国民学校，赤穂村赤穂国民学校，飯島村飯島国民学校ほか 役割…挺身部隊用爆破焼夷および行動資材，写真資材，宣伝資材，憲兵資材ならびに簡易通信機材の研究および製造
伊那村 分工場	長野県上伊那郡伊那村伊那村国民学校 役割…遊撃部隊用爆薬関係資材の研究および製造

(2) 北安分室　< 長野県北安曇郡松川村・池田町・会染村 >

長野県北部，北安曇郡の松川村を中心に，第一科の中でも電波研究などの部門が電波研究に特化した多摩陸軍技術研究所の研究室という位置づけで北安分室として疎開をしました。３万坪の土地を借上げたうえに，この北安分室だけは研究施設を新設し研究を続けました。また位置関係を見ると，松代を空襲から防衛する場所にふさわしく，まさに本土決戦想定下で配置された現場で，迎撃用の電波兵器やロケット砲などの研究が進められたと考えられます。

北安分室	長野県北安曇郡松川村神戸地区，松川村松川国民学校，会染村会染国民学校，池田町北安曇農学校ほか 役割…電波兵器（く号兵器），ロケット砲，超短波，超短波受信誘導装置の研究

電波兵器の礎石
（篠崎健一郎氏提供）
松川村神戸原に 90 年代まで残っていた。

(3) 登戸分室　< 神奈川県川崎市生田 >

ほとんどの部署が疎開した後も残務処理や分散した部門同士の通信の中継などのために残った者もいました。第三科では偽札の印刷を継続していました。

登戸分室	神奈川県川崎市生田（登戸研究所） 役割…疎開後の残務処理，疎開先間の通信連絡の中継，第三科による偽札製造の継続

(4) 福井県武生村　―北陸分室（北陸分廠）

登戸研究所第三科は，1945（昭和 20）年春に空襲を逃れるため、福井県武生市にあった旧武生製紙所（現加藤製紙）と旧西野製紙所（現福井特殊紙）に場所を移しました。ここを北陸分室といいます。登戸研究所にあった印刷機械の約半数を移し，そこで偽札印刷をする準備を始めました。登戸研究所が攻撃された場合の緊急避難用として，武生の準備をしていたとみられます。北陸分室を武生に選んだのは，伊藤覚太郎大尉（第三科北方班 班長）でした。

1945 年春，旧武生製作所（現加藤製紙）は戦争中の統制で事業を縮小していましたが，登戸研究所は事務室を接収してここを本拠地とし，印刷工場一棟も接収し，そこに人が入れないよう機械を持ってきて据え付けたのです。しかし，偽札製造の中心はやはり登戸研究所でした。

提供：福井新聞社
（2013 年８月 15 日より）

鎌仁別荘：伊藤覚太郎大尉が 1945 年春移住していた
写真提供　渡辺賢二氏

登戸研究所第三科は，250 人ほどいた勤務員の約半数が移動したとみられます。北陸分室に登戸から来たのは所員では伊藤大尉ほか鈴木中尉とあと１人，それに技手や女性事務員が移りました。また，北陸分室の川津敬介技師などは粟田部に入り，西野製紙工場旭工場にいました。武生と粟田部が製紙部門として接収されたのです。

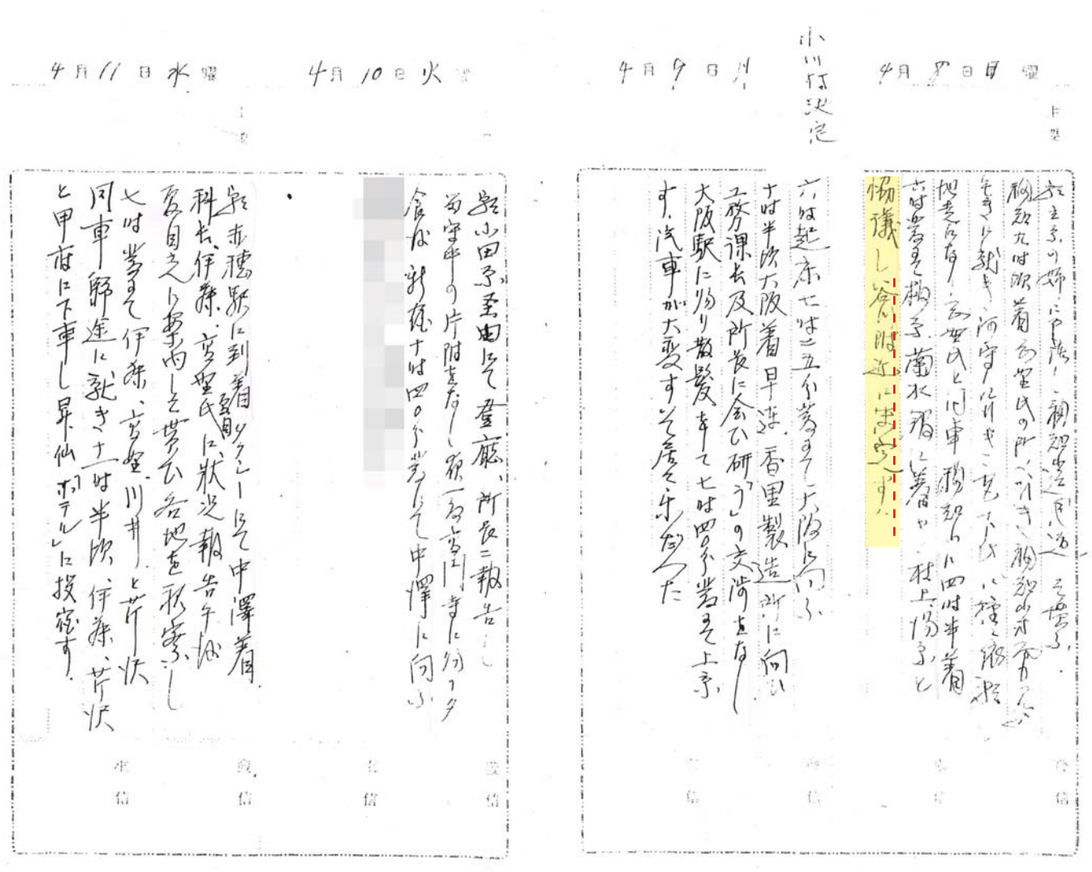
登戸から届いた彩紋機や印刷機の据え付けが主で，これから製版にかかろうというとき終戦になりました。

(5) 兵庫県氷上郡小川村　―小川分室

1945 年に入り，本土決戦が現実味を帯びてくる中，米軍の攻撃によって東西各地区が孤立することも予想されたため，東北・関東・東海等を管轄する第一総軍，九州・四国等を管轄する第二総軍が４月に創設されました。

このような国内の情勢に伴い，登戸研究所も本土決戦に備え，東側だけではなく西側への分散疎開が求められ，前述の『大月日誌』にあるように 1945 年４月８日に兵庫県氷上郡小川村（現・兵庫県丹波市）が疎開先の一つとして決定されます。４月 27 日の設置会議を経て，５月の大月氏らによる視察を終えた後，６月 18 日に篠田鐐登戸研究所所長自ら国民学校に出向き，学校が「小川分室」という工場になることが決定されます。小川分室は，長野につくられた中澤製造所ほど大規模ではありませんでしたが，本土決戦に備えて焼夷剤を製造していたことが『宮崎中将日誌』から解っています。

なお，小川村への疎開作業に携わった元登戸研究所第四科所員は，小川村の様子を次のように証言しています。「小川村には技術者はいなかった。小学生が動員されて働きに来ていた。小学校 [国民学校] の講堂の木床をすべてコンクリートに敷き替えていた。」



『大月日誌』４月８日付～４月 11 日付（大月昌彦氏寄贈）より
４月８日付　　の箇所に「谷川附近に決定す」の記述がある。
谷川は，小川村が位置する福知山線「谷川駅」のこと。
欄外に「小川村決定」とあるが大月陸雄氏によるものではない。